



平成24年5月1日
 柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所：川崎市麻生区上麻生6-40-1柿生中学校校内
 電話：044-988-0004 (柿生中学校)
 第48号

川崎市北部で多数発見されている 板碑 (いたび) は修験者 (山伏) の名残りか？

「柿生文化」前々号(46号)で、柿生・岡上が修験者の修行の場であったのではないかという根拠をいくつかあげました。もうひとつ、川崎市北部の丘陵地帯でよく発見される板碑 (いたび) は鎌倉時代から江戸時代初期の間、平らな石で作られた石造物 (写真参照) の存在です。板碑の起源はまだよく分かっていませんが色々な形態があるようです。

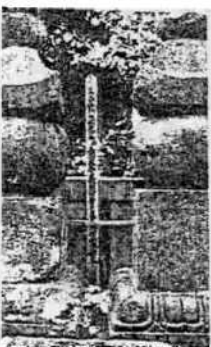
板碑は全国的な広がりをもち、起源はもともと釈迦の供養のために建てられた供養塔 (仏や仏の教え、僧、死者の霊に供え物をして死後の幸福を祈るために造られた塔) で中心部の土中に釈迦の骨 (舍利ニヤリ) を入れて祀っているインドの「ストゥーパ」が起源と思われます。(次ページ参照)



(「板碑」岡上隼氏所有)

このストゥーパが「五輪塔」「五重の塔」「多宝塔」「宝篋印塔 (ほうきゃういんとう)」等の「塔」に変化します。「塔 (とう)」の語源はストゥーパの「トゥー」が変化したものです。

また、墓地にいくと「卒塔婆 (そとうば)」という細長い板が立て掛けられているのを見ることができますが、この「ソトウバ」はインドの「ストゥーパ」を起源とする言葉です。



(墓地に見られる卒塔婆)

「板碑」はいずれにしても供養塔の一種であることは間違いありません。ただし、修行者が修行した証 (あかし) として建立したものや「逆修 (ぎやくしゆ)」といって、生前にあらかじめ自分のために死後の冥福を祈る目的で碑を建立したものもあります。

そこで「板碑」が修験者とどういう関係にあるのかということになります。じつは修験者たちは、修業のため山に入る時、山中の樹木を使って入山年月日を書いて証としたり縁者の供養碑としたり自分の死後の冥福を願ったりして板碑によく似た「碑伝 (ひで)」というものを作っていました。板碑の起源を考えますと碑伝が板碑に変化したということも考えられ、埼玉からは修験者の姿が、京都では修験道に縁のある人名が彫られた板碑も発見されています。

右の表は川崎市内で発見された板碑の数について区別に調べたものです。(昭和63年版「川崎市史」掲載の数値をもとに作成)
 高津・宮前・多摩・麻生区の川崎北部の丘陵地帯にたくさん発見されていることが分かります。また「真言」の銘のあるものが北部丘陵地域に多いということは密教との関係の深い修験者の存在が考えられます。どうも川崎市北部で発見された板碑は修験者と深い関連があるように思えてなりません。(次へ)

川崎市内の板碑の分布 (年代・発見場所が明確なもの)

川崎区	15	(1)	2.1%
幸区	13	(0)	1.8%
中原区	49	(0)	6.8%
高津区	204	(5)	28.5%
宮前区	174	(0)	24.3%
多摩区	123	(9)	17.2%
麻生区	137	(6)	19.2%
(計715)			()は「真言」の銘のあるもの数

前ページより続く→川崎市北部で発見されたすべての板碑が修験者に関係しているとは言いませんが、少なくともその一部は修験者に関係しているということは決して無謀な考えではないと思います。特に川崎市北部が修験者の修行場であった可能性は、地名・地形的環境・真言密教との関係・秋葉信仰・御嶽信仰などから確認できることでもあり板碑とのつながりは濃厚であると考えられます。(参考資料:「川崎市史」「日本の美術」「中世の板碑文化」)

「塔」「板碑」の成り立ち



(インドのストウバ)



(五輪塔)



(多宝塔)



(五重の塔)



(修験者の碑伝二ひで)

(板碑)

郷土の歳時記

5月 (早月二つき二早苗を植える時期の「早苗月(さなえつき)」を略したもの二「早月」の「サ」は「神に奉げる稲」という意味)

◎端午の節句(たんごのせっく二5月5日)

端午とは月の始めの午(うま)の日を言います。

もともと中国から伝わった年中行事です。中国では5月は「悪月(あくつき)」とされ、5日には蓬(よもぎ)で作った人形を門戸に架け、葉草を摘んだり菖蒲酒を飲んで邪気を払ったようです。

邪気(病気を起す不潔な悪気)を払うということですが、この季節は何か邪気と関係があるのでしょうか。考えてみますと旧暦の5月5日は現在の新暦では6月の初旬でしょうか。ちょうど食中毒や伝染病などが流行し始める時期にあたります。その辺に関係があるのではないのでしょうか。

日本でも、「日本書紀」や「万葉集」に書かれています。葉草を採る『葉狩(くわがし)』が行なわれていたようです。菖蒲(しょうぶ)も古くから邪気を払うものとされ「枕草子」には各家々の屋根の上に植えていた様子が書かれています。

日本の歌にも出てくる「粽(ちまき)」も中国から伝えられたもので、こんないわれがあります。『中国戦国時代の詩人の屈原(くわんげん二紀元前3~4世紀頃)が5月5日に祖国を憂えて川に身を投じ亡くなり、それを人々が哀れんで毎年5月5日に粽(ちまき)を川に投げて供養したのが始まりといわれています。』

端午の節句につきものといえば「鯉のぼり」です。現代のような鯉のぼりが使われるようになったのは江戸時代頃からだったようです。もともとは、家紋や絵を描いた幟幡(のぼり)をたてたようです。今でも地域によっては、この方法が使われていて、先祖の霊を迎え入れるときに、先祖が家を間違わないように家紋が付けられたようです。

柿生では、長男が生まれ、お宮参りが過ぎて初めて迎えるこの節句には、母親の実家から吹流しと、まごい・ひごいの鯉のぼりが送られます。鯉のぼりにつける竿は、山からできるだけ真っすぐな杉の木を切り出してきて、皮をむき、ワラやタワシで磨きます。生の木ですからたてるのは大変だったそうです。また、この日には、軒先に菖蒲と蓬(よもぎ)をさしたそうです。

「うつし世の静寂(じま)に」 川崎北部の人々の 素朴な祈りと生活の記録

— 小倉美恵子氏が語る「祈り」「絆」とは —

先日、宮前区民館で宮前区土橋にお住まいの小倉美恵子氏が企画したドキュメント映像「うつし世の静寂に」の映写会に出席させていただきました。

川崎市北部の多くの丘陵と谷戸から成り立つ多摩丘陵には、土地の神々や祖先に素朴な祈りを捧げ、代々受け継がれてきた伝承を守り続けている人々がいます。

柿生・岡上にも昔から継承されてきた「念仏講」「秋葉講」「お召講」「大山講」「御嶽講」などがあり、神や仏が同座する「場」に人々が集い、絆を温めながら風土や祖先とつながりあってきました。

この映画は、川崎市北部に現在まで継承されている「念仏講」や「巡り地藏」「谷戸の生活」「初山の獅子舞」の映像を通して、過去とのつながりのなかで今を生きる



(念仏講の教珠まわし)

ことが私たちの幸せや、いのちの輝きにつながっていくのではないかと問題提起がなされていたように感じました。

昨年の東日本大震災以来日本中で“絆”という言葉が私たちの心を動かしてきました。

現代の孤独社会のなかで“絆”とは何か、“豊かさ”、“幸せ”とは何かということを考えさせられ、大変印象に残る映像でした。

近日、「うつし世の静寂に」の映像と小倉美恵子氏の講演を企画したいと思います。

熱気溢れる「杉山神社」論争 鶴見川文化のルーツを探る

3月25日(日)、柿生郷土史料館で第33回カルチャーセミナーが開催されました。今回は「杉山神社と鶴見川文化」というテーマで麻生観光協会の松本良樹氏をお招きして講演をしていただきました。氏が長年研究を積み重ねていらした「杉山神社」のルーツについてわかりやすく説明していただきました。

氏は、その中で3つの謎を提起されました。①は嘗ては72社あった内、式内社としての杉山神社はどこであったのか ②は杉山神社の本来の祭神は何という神であったのか。特に忌部氏との関わりのなかで考えた場合、忌部氏の祭神が見当たらないということ。③は、鶴見川流域とその周辺にしかない杉山神社を建立したのは果たして忌部氏であったのか。また鶴見川流域の古墳の主は忌部氏であったのか。そして「杉山」という名称はなぜ付けられたのか。などたくさんの疑問について提起するとともに、多くの研究者の見解やご自身の私見について述べられました。

多くの疑問のある杉山神社の存在は、今後の皆さん方の研究に待たれることが大であることは言うまでもありません。

近いうちに、カルチャーセミナーで意見交換会を開催したいとも思っています。



(講演される松本良樹氏)

第38回 全国地名研究者大会

時: 6月9日 午前10時
場: 国際交流センター
参加費: 2000円

テーマ「災害と地名」

6月9日に全国地名研究者大会が中原区の国際交流センターで開催されます。今年のテーマは昨年3月11日の東日本大震災以降全国的にクローズアップされてきた災害地名をテーマにして9名の講師が講演を行ないます。大変興味のある内容ですのでご紹介いたします。申し込み等は右記へ電話してください。(日本地名研究所 044-812-1106)

- ① 谷川健一氏(日本地名研究所長)「災害地名の教訓」
- ② 川島秀一氏(リアスアーク美術館副館長)「津波と地名伝承」
- ③ 太宰幸子氏(宮城県地名研究会会長)「自然災害と地名～地震と津波から～」
- ④ 滝沢主税氏(長野県地名研究所長)「長野県の災害地名」
- ⑤ 田中弘倫氏(海の熊野地名研究会会長)「那智川流域の土石流水害と地名」
- ⑥ 桑原康弘氏(和歌山県文化財研究会理事)「水害と地名」
- ⑦ 三石 學 氏(海の熊野地名研究会事務局長)「熊野川流域の災害地名」
- ⑧ 藤吉 洸 氏(熊本地名研究会事務局長)「昭和の熊本大水害と地名」
- ⑨ 砂川哲雄氏(八重山文化研究会)「沖縄・宮古八重山の明和の大津波」



柿生郷土史料館開館のご案内

開館時間

開館: 午前10時
閉館: 午後 3時

5月 6日(日)
5月13日(日)

6月 2日(土)
6月 9日(土)
6月16日(土)
6月23日(土)

開・偶数月は土曜日
閉・奇数月は日曜日

5月27日(日)(カルチャーセミナー)
※27日は午後1時30分よりセミナー開催

※6/30日は休館日です。

柿生郷土史料館の5・6月の催物

(特別企画展)

※問い合わせ 988-0004 (柿生中学校)

第5回 特別企画展

「写真でたどる

郷土百年の歩み展 I」(期間: 4/21~7/22)

(各種セミナー)

第35回 カルチャーセミナー

テーマ 「中世の柿生・岡上～南北朝・室町時代～」

◎講師 中西望介 氏(戦国史研究会員、元川崎市文化財調査員)

◎期日 5月27日(日) 午後1時30分より

◎会場 柿生郷土史料館

◎内容 南北朝・室町時代の柿生・岡上の姿を古文書や考古資料から探る。